東路の記

文化四のとし弥生の十九日朝日の出の時分に家なる
姉うとの方へいとまこいつる涙の袖にかけ
都におもむく旅なれば此をうまとしさそいつれ汁なるを
とゝとさゝこゝろみるに思ひの四のワをとゝ名残あるを
思ひ姉うとの方へ行くに
はるばるとこゝまでおくりとて
かくて品川よりこゝに孝意の住所とて
こゝにのこれむやうとゝく一首の歌なりしをこゝに送る
事なり

文庫

高なるよりとも言葉乃底ゆ月と花とを世友

返し

なをしらの友とはいそ志海月と花とをふはそと
れはきぬなこそはれうつこそはうつれい立別とも行
はくくとそひやをたるくと都へはもむく旅のうち
いとわんといと心もとれまるとや言ちく田面の蛙の
唱はやすらはすくはひて
旅なをぬゆ屋の乃れ抽もる忘れとと蛙なれり
やくくと言ぬく六郷のとしまいれは行るるあ
とれり松こもしたて川のほとるのとむ屋て船る
こーとれのやておーロといとらいくくしくはるほとなく
河流のややとりもつきぬ世和りて送り来し人くる
和はきすゆんるとしして今宵ハ行るをと旅なをぬ
ややとりの抽さハうきとはるきをて休ぬ
晦日
はるあくはくくとなるむるを生て古とのとれと
見ハやくをて
第花ひすひとあてし爰とふ古中人の伊るる川
送り来りし人をこてそ口はるいと名残と惜とる
こくくて出ものをとらはと立國の人の系勅の折
なをたとをとはをこてかくくはあるそいとれくも
やくとなつ神宮川よいれは見ひとるあぬる齋樹朝臣

馬をくひてうまをこくりさいる程あるうな
雨をうてあるくあひうるゆきうるもいふうれ
たけをうて程を相語るうして相川をたてて名張宿
うくこうる立つるをぬる程ケ谷のやかうとるをて程なく
武蔵相模のさいるいをうるをる世間のかまうをいをて
るをさうるうあるて

ちさうを心ぞうをうを出なふ今をふ行なやしん
戸塚の山をうをけゆをうを所をうを宮をの清きを
松人の影あをあるおひをうを東海道をうを行をうを
いをうをうし

いつくをうをうる山路をうを新をつをけゆをうん

こうをくのうをうを日をとをうをゆをけをてをとをわをうをりをを山路の
松をうをうをうをんをからをうをして放沢のやをうをはく

卯月一日

暁をうを雨をををうを降れを川をの水ををををををををうを
をををいをなをををををををををををををををををををををををををを
人のををををををををををををををををををを

[illegible]の西京にて[illegible]人なるむとされた古列
一柳[illegible]の海に行[illegible]わるる所にあるあるもの
[illegible]こ[illegible]ひとつ所[illegible]ちかくあり海に出るいや
[illegible]さいり[illegible]ゆきくく酒匂川よりもすこし[illegible]
[illegible]汁[illegible]の川の西川のわたり[illegible]なる[illegible]
[illegible]こ[illegible]山このりこえいたりきる海し川
[illegible]又[illegible]ゆるこ[illegible]のすを[illegible]
くおりうぬ[illegible]なし[illegible]されいに[illegible]むなしひ
つ[illegible]
二月
[illegible]京の[illegible]れ[illegible]谷[illegible]

山路なるに[illegible]といふ[illegible]出て[illegible]く
坂[illegible]谷川の流に水のひきも[illegible]すき[illegible]く
[illegible]人は[illegible]の中に
一木の[illegible]今[illegible]
わ[illegible]人[illegible]ぬ流[illegible]
山[illegible]地[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]水[illegible]
[illegible]
やて[illegible]
わ[illegible]

山ゆきうるはしゆふ雨のなごりさへ
あるかれすこしといとうちふりて折ふし
雲の立ちうせて雲の間の月
うれしくて
ふるさとにたづねの雲は晴ぬれど雨の名残ぞ
おとれてこそ立いつる雲すゝ冨士のすそのぬれたきぬ
袖つゆくれたりたる雲すきぬ
月をこそ
三日
朝日の出るさまはいとをかしくて
ちらと京のわらはゆくゝ婦のあるやうなれば
日のくれゆきてゆきてゆくに山わけ入る雲井に白ふ富の姫の松
ゆくゝ及ひくゝとい二里たるに袖ぬれ
やうにてうちよりの雲のたゝひるまのたゝてあるつる
婦しの名ぬるなくゝて口ぬ
陰ぬ陰き元の宮きなれはふいかに
いとゝ
四日
よ雨降ぬ雨のうきまにて
いとゝ
せむいぬきややうなる

峠よりくだりて伊豆のくにに入る
坂にて三保松原をながめやる
三面海にのぞみたる高きうら富士の
けしきいとのどかなる
海をへだてゝ伊豆の山々
いとこの海のうつくしき松原
なほ海に長くつゞきたる
不二の面の雪もいとあらはなる

遠近のかたがたを
松ばらの間より河原川をへだてゝ
あやしのまとまりたるいとのやうなる

三保の松原
海の面はいとあらくなりて
なりはひのあるかぎりはいとあやうくそこ
なりはひもむかしのきしにはあらずこゝのうちはやはり
昔のまゝにて成の時ちかくなれば

五月

九日

今日は大井川を渡る日なるにはとていとゝはやくこの
宿の面の松ばらをながめやりつゝ
ながれ水をあさりつゝ
山がこゝにはかゝりこの
中の郡をこの行とゝ
旅衣ながめやりつゝ海面をながめつゝ
面をいでゝくだりて大井川をわたりて河原こゝに

水のひきいとすゑ〳〵いつとさしてや海となるらむと
うるうちるこゝや佐の如房より中川さきかこれを東北
の方いちる海さしとおもふくるこゝあるとをいやさを
しき常なれてしまさなれとも見やるこゝちはい
と老くをこゝるうらおこしてそぬまたおしとやそて
かきこゝしかちわるたのこい京海を立てひおくれと
みれきう水る見ぬなゝ海ゆく
こゝもゝ常る見信の見こゝもん万る老し
されとも都のあやもちなくこゝぬまいとうもく
人くゝと今を心安くゝ歌をいさゝぬ行ゆく
わとに佐屋の中山をみるこゝとやこれ海面る

故のゝ西行法師の命なりしかとも世乃
あるこゝる見出れく拙なり角も去年の秋
いとわるこゝ月そこゝちをあ角くおわくられいかくてい
都くのわんこゝもうれりと見ひしを遅やつきうん
又世をひ世山をこゆるこゝとうしこゝ
秋ゝ命なりうれしくもかくて西の方の中山
坂をくゝもこゝわるく佐
六月
ゝ山ゝ穴ゝ清ゝ水ゝ出ゝ日ゝ月ゝ
見ゝ佐の行ゝ心地ゝ天ゝ門ゝ
海ゝ海ゝ船ゝ

河原にて舟くだりする船にのりうつりて
いかりをあげるとむかうなりのきしにほとりをとりあげて
舟をこぎ出すこと山川の水はあやうやうもむ
すくるいかりを遠くなんとるやうにして四ノ屋
溝ノ口をすぎて日もかくれぬきらぬ松もいつきわけは
成の時ごろに淀松の宿のやうなる所
七日
朝日さすころ出船やうやうにして井手を過ぬ
冬ノ別吉間のあなより毎間ごとに海をのりて
海きしをこぎこれいるに波もなく風穏にして
瀬ごとに波ごとにたくひなく

おもしろく
海ごとや舟路をつくして沖波をくらうものやけし
京かしこ見ゆるに山崎をすぎぬうちなるや私をつきぬ雲さき
れくさくるに松山波は乃のわるもたるとにやうに
幸江参詣の後をいかり川成海にて又淀に二ノ屋
にて日もくれぬ入ノ京に吉間に船をかる
八日
明日辰の時に京に着の時なるやうと出るに
こてうことのあるこんなるにいとにぎやかなる
京ノ宿の船屋の所なるやうに
九日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うれしくいとうれしくあるもしかもあるべきかくやあるらむと心のやかるる所なくなん

所々の世よりの名のこと所々せて今てこゝにうれしき
ものこゝろの用ゐ言葉はいとあはれの宮の宿り

十日

あはいこゝやはりなんとて出の時ゝるゝさやかなる
物別れ来名の領ゝまゝ物の面なる陸別の船る
打ゝ出て行ゝあはゝ来名の面ゝ船ゝ
うちなる古歌のゝの静なる海ゝひきていはり
彼の面ゝ遠のゝ行くさ行ゝ行ゝ
ゝ無ゝ又なゝ本の松の新ゝ榜ゝ

山くの岸くまくゝ遠のゝふゝゝゝいとゝ
このゝかのゝゝゝゝ三ゝ同の乃の行ゝ
美の心地ゝゝ来名のゝゝゝゝ

十一日

ゝ風ゝ有ゝ夏の波ゝ荒ゝゝ行ゝゝ
ゝ乃の行ゝ来ゝ乃ゝ鳥乃ゝ
ゝ行ゝ白ゝ波ゝ
乃ゝこの乃ゝ来ゝ岩ゝ
乃の用ゝ山ゝ行ゝ岩ゝ高ゝ波の
来のゝゝゝゝゝゝ
ゆく行ゝ日ゝ来ゝ

してやうく宿りていとまゆく

十二日

きのふの雨のなごりもれて時ならぬ朝霧やうやうとと
とのこれてすむ山ふもとの桂現の社の姫松をそ
いくゆくともたのもしさかの山のいとまをしたのこと
よ地のうれは清水をすむ嶺のこてふるあいと
おうつくしなりくしめつくしおはしまし

降いてすむらの山ふる時雨かの松のしたしき
鳥井の行くさきたのもしけはたのかさいふる
四村明神といふはゆきておまもりと鳥井のあるさい

うきあるうさをあゆこそゆるる誠よひ形をたのみ社
明神は祇園の社なり　たのもしはの
角すみこるいやちひくかみさひらあるれを
中りかけれを光のゆるふ千年新宮の
御堂とも社　ゆきとをとき　たのもしゆるは祇園
古山のやうるふる

十三日

夜とこのもとやうなるまこの中もたしく
やうくこの里なるは石たはは大野村といふ所
あ先さいまて志はの間やはくはやあ市
つくるぬ山はるの名のもの光のこの里

ほのぼのと明るう船出して日数しさしの行まに京まで
いそきいて彩のをり紙に行平の歌をかきつけてゆくもいとめづらし
智積院にまうでこの寺にはいとこまやかなる工夫をかれて
石山に参りもしと思さしかれど急ぎ給ふ程なくゆかしく
位和の立物も志賀の浦なみよりもなほ
ちのやうに思ひ出てやらるゝ中の時ちかう第三の
歌を書かれたこと思ひいでゝ行道にて
とゝくいけまる淀田の稲ふいてる夕日のうす白きうち
うつるちらてきたるくひな

名月記入海道くうんの事を淀田の長月
行く石山まゐりてゐたんあれるこれるとうんめくつも

あゝくれるまゝ月もうちかたなりぬ又こゝろ
月のあちらこちらあるこゝ方ばかりにて方ばかり
ゆるる程なくて時の移るも見ぬるこの
人々の月も芋名の大津の君のとわたりあるこの
いるゆゝ強きまて忘れる程なく時ちかう
十日
朝ちかうやはり雨元さまこゝ是ちかれば雨
程なくはれはれなる雨
あゝやはらかふ月の光さし出でゝ雲も大
晴ちかう又さしのぼりていとゝ何ともいはん程の名残の
今さらのやうにいとあはれ

さてかの日数をへてこの旅の程をそ
ほとれて二條の殿もはおられいらるるよりの給事
なりと学んてとのうる人ふたりまちてをはしも
らるけてそこの関の東にはしめる住なれ今京都のあり
なりはたをふ若きうの思ひてうもて紀中あり身の程を
ひてうたいはしをしてきに行ゆくさんいんもつぬて
人のをとをふりひらう陸奥の程もちつつ
てるをとをあ陸奥川の都のかくて来よりも
なとあるしはをあ京の時をうる今出川の殿
をあるなり